

林羅山における文章の作法

——『古文真宝後集』との関わりに触れて——

陳 可冉

一 はじめに

林羅山の漢詩文について、四男の読耕齋は「行状」（『羅山林先生集』^①・附録・巻第三）の中で、「高歩于文壇、雄揚于詩場」と讃えている。身内による賛辞といえども、事実と齟齬するものとは思えない。ただ、当代の詩壇には朝鮮通信使に「日東之李杜」^②と激賞された石川丈山もいたりするので、「日域之文章、以羅山爲第一」^③との文名が異邦の地でも聞こえたということなどから見ると、やはり文の方が羅山の真骨頂であるようだ。

博聞強記の天資に恵まれた碩儒ではあるが、羅山における文章の達成は、決して一朝一夕の出来事ではなかった。『文集』所収の随筆などを一読すれば分かるように、古今の群書を渉猟する中で、彼は常に手本となるべき文章の表現や作法に細心な注意を払っている。作文の上達に資する発見なら、たとえ些細なことでも必ず記録しておくのは、長年の読書生活で養った羅山の習慣である^④。本稿では、作文の範例や方法に関する羅山の発言を彼の作品と照らし合わせながら、理論と実践の両面から林羅山における文章の作法を探ってみたい。

二 文章の手本と字句の来歴

羅山の文章を理解するには、まず彼の目指すもの、つまり理想の文章とは何かということ把握しなければならない。二三行の文字でその発言のすべてをまとめるのは到底無理かも知れないが、こと「文章の手本」に関しては、次の二条が羅山の主張を明快に示していると思われる。

凡作為文章無常師。唯以古文為師。

(『文集』・卷第六十六・「隨筆二」、慶長年中作)

凡そ文章を作為するに常の師無し。唯だ古文を以て師と為す。^⑤

四書六經の外、文章の手本とすべきは、左傳、國語、戰国策、楚辭、莊子、史記、漢書、其外韓文、柳文、歐陽、東坡也。 (『梅村載筆』^⑥・人卷)

『文集』・卷第六十六・「隨筆二」に曰く、「大學は曾子の文章なり。中庸は子思の文章なり。七篇は孟子の文章なり。論語は聖門高弟の文章なり。六經を合せ、之を古文と爲す」(原漢文、以下同)、又曰く、「吾曾て謂へらく、四書六經の古文たるは、これ皆道德の器なり」と。羅山の言う「古文」はつまり四書六經であるので、何より儒家の經典を重んじる姿勢は、上の二条に共通して見られる。『梅村載筆』の方にさらに注目すると、「四書六經の外」、「其外」のように、「外」という語が二回使われているが、それを目印に、羅山の考えた「文章の手本」を三種類に分けることができる。すなわち、文を学ぶ人にとって、第一級の手本は儒家經典の四書六經であり、その次はいわゆる左国史漢に、戰国策・楚辭・莊子といった東漢以前の文章、さらに次は韓柳歐蘇を代表とする唐宋の文章である、という。もっとも、そのような考え方は明らかに儒家の文章觀に基づくもので、羅山の独創ではなかったことは、詳論するまでもない。ただ、羅山の場合は口で言うだけではなく、自らもそうした理念に即し、積極的に作文の実践に取り組んでいたのである。

寛永十七年、内藤直信^⑦のために、羅山は「老圃堂記」(『文集』・卷第十七)を著したが、やはり直信の強い要望で、羅山はこの文に対し、自ら詳細な語釈を施した。本文の字数を遥かに上回る二十七条の注釈には、下記のごとく出典の数々が示されている。

○文選・蜀都賦 ○陶淵明・歸去來辭 ○史記 ○薛能・老圃堂詩 ○文

選・君子行 ○礼記・玉藻 ○礼記・曲礼 ○莊子・大宗師 ○広列仙伝
○漢武内伝 ○韓退之詩 ○五燈会元・太原孚上座伝 ○五燈会元・十
九・五祖法演伝 ○禅録 ○山谷内集・序 ○南史 ○南史・滕曇恭伝
○楊龜山文集・三十八・老圃亭詩 ○論語・学而篇 ○孟子・告子下篇
○孟子・万章篇 ○論語・子路篇 ○孟子・滕文公上篇 ○詩・豳風・七
月篇 ○論語・郷党篇 ○詩・大雅・綿篇 ○朱子

いささか学術的なリストと思われなくもないが、できるだけ字句を広く経史子集の中から博搜し、それを自分の文章に活すという羅山の手法がはっきり表れている。この「自註」の終りに、羅山の三男である鷲峰が曰く、「按ずるに、此の文僅に二百数十字、しかれども其の出處、件件此の如し。其の餘りの文章、字を用るの來歴を准じて知る可し」と。つまり、用語の來歴を重視し、博引旁証の書き方を用いるのが、「老圃堂記」のみならず、ほかの文章にも見られる羅山の特徴であるという。

三 『古文真宝後集』との関わり

確かに、羅山の文章は彼の学識と同じように、「洽博」の一言以て之を蔽うべし。慶長七年作の「三体詩古文真宝弁」(『文集』・卷第二十六)の中で、羅山は詩文の手本を専ら『三体詩』・『古文真宝』の二集に求める当時の風潮を戒めている。

本朝之泥于文字者、学詩則專以三體唐詩、学文則專以古文眞寶。皆以爲周伯弼、林以正有益于世也。寔二集之詩文、精審明暢。習之則亦有益于文字乎。曰愈。雖然、失于隘矣。念哉。

本朝の文字に泥む者、詩を学ぶには則ち専ら三體唐詩を以てし、文を学ぶには則ち専ら古文眞寶を以てす。皆以爲へらく、周伯弼、林以正、世に益有りと。寔に二集の詩文、精審明暢なり。之を習ふは則ち亦た文字に益あるか。曰く、愈り。然りと雖も、隘に

失す。念へや、と。

また、『文集』・卷第六十六・「隨筆二」にもほぼ同意の文^⑧があって、やはり二集だけだと「隘し。博きに非ず」と、羅山は再三の注意を促し、詩文の創作における「博」の重要性を強調した。

一方、『三体詩』・『古文真宝』の詩文は「精審明暢」であり、「これを習ふは則ちまた文字に益ある」ことも認めた羅山の態度も注目に値する。言うまでもなく、文の軌範としての「古文真宝」は、主として散文を集めた後集の方を指すが、そもそも羅山の諺解を鶴飼石齋が増述した『古文真宝後集諺解大成』は、「今日においてもなお最も善い注釈書」^⑨と目されているから、羅山と深い関係をもつ『古文真宝後集』は、彼の文章を考える上で、非常に重要な参考となることは間違いない。

実際に検証してみると、『古文真宝後集』所収作品の語句や発想は、『文集』の所々に散りばめられていることが分かる。一例を示すと、羅山に「太山北斗」^⑩と仰がれた蘇軾の文章に「喜雨亭記」（『古文真宝後集』収録）という一篇があるが、その文の最後の部分と羅山が元和八年に書いた「向陽庵記」（『文集』・卷第十七）の末尾を比較してみよう。

一雨三日、伊誰之力。民曰、太守。太守不有。歸之天子。天子曰、不然。歸之造物。造物不自以爲功、歸之太空。太空冥冥、不可以得而名。吾以名吾亭。
（「喜雨亭記」）

一雨三日、伊れ誰の力ぞや。民は曰く、太守なりと。太守は有せず。之を天子に歸す。天子は曰く、然らずと。之を造物に歸す。造物は自ら以て功と爲さず、之を太空に歸す。太空冥冥として、得て名づく可からず。吾以て吾が亭に名づく。

歸之庵主。庵主不當。歸之國主。國主不有。歸之天道。天道不言。四時行焉、百物生焉。吾以爲記。
（「向陽庵記」）

之を庵主に歸す。庵主は當らず。之を國主に歸す。國主は有せず。之を天道に歸す。天道は言はず。四時行はれ、百物生る。吾以て記と爲す。

一緒に並べさえすれば、両者の関係はもはや贅言を要しない。『論語』・「陽貨篇」からの引用である「四時行焉、百物生焉」^①の語を除いて、「向陽庵記」における庵主→国主→天道の順に進む筆の運び方は、太守→天子→造物→太空というふうにレベルアップする「喜雨亭記」の図式と、まことに一轍より出づるが如し。

無論、羅山が自ら「余家有東坡文集一百二十卷」（『文集』・卷第六十五・「隨筆一」、慶長年中作）と自慢げに明言しているように、蘇軾との関わりを云々する時、必ずしも『古文真宝後集』にこだわる必要もないとは思いますが、しかし、十三歳で加点した『東坡全集』^②と一字一句の考証を重ねて諺解した『古文真宝後集』^③とでは、読後の印象として、やはり『古文真宝後集』の方が深かったのではないだろうか。これと似たようなことは、恐らく『古文真宝後集』所収の他の作品との関係についても言えるかと考える。

陳后山曰、歐陽永叔不能賦。此語恐不可以爲定論也。若秋聲、憎蒼蠅、即文章之鼓吹也。

（『文集』・卷第六十六・「隨筆二」、慶長年中作）

陳后山曰く、歐陽永叔賦を能くせず。此の語恐らくは以て定論と爲す可からず。秋聲、憎蒼蠅の若きは、即ち文章の鼓吹なり、と。

韓文公送孟東野序、用鳴字三十九。其筆勢句法優于墨子。陳后山思亭記、用思字十四。其簡而麗步驟于文公。^④

（『文集』・卷第七十一・「隨筆七」、正保四年作）

韓文公孟東野を送るの序に、鳴の字三十九を用る。其の筆勢句法墨子に優れり。陳后山思亭の記、思の字十四を用ゆ。其の簡て麗きこと文公に步驟す。

例えば、上の二条で示されるように、歐陽修の賦を挙げるのに、『古文真宝後集』に収められる二篇（「秋聲賦」・「憎蒼蠅賦」）を列挙することと、韓愈の「送孟東野序」と陳師道の「思亭記」（ともに『古文真宝後集』の収録作品）を同時に論じることなどは、『古文真宝後集』への記憶が羅山の脳裏にいかにも鮮明に残っているかを物語る。

四 「醉翁亭記」の影響

『文集』・卷第十五から卷第二十まで、六卷にわたって羅山の作った「記」を載せているが、中には慶長十二年作の「恒亭記」（『文集』・卷第十七）という一篇がある。この文において、二十五歳の羅山は『古文真宝後集』所収の歐陽修の名文「醉翁亭記」を模範に、それまでの読書で身に付けた様々な作文の技法を駆使している。以下、煩を憚らず、典型例の一つとして「恒亭記」の全文を掲げ、主に羅山の「記」を中心に、「醉翁亭記」からの影響を検討しながら、羅山における作文の方法を分析する。

環亭而三隅皆山也。南眺漫漫有洋海之無垠焉。東出者小鹿山也。東南見者八幡山也。煙斜雪飛於東北者土峰之高秀也。北望蒼莽則有重山層巒焉。西有隔河之數峰也。近之而清水山之松、遠之而甲斐白峰之雲。其勝形不易一彈也。亭下穿地有略約。修藩垣而植衆木。四時花葉交色以慰人目。亭子信賢也。有恒之術歟。其以恒名之者示有常也。環亭之山有常固久矣。其術之恒與亭之名庶幾相稱也。主人仕吾幕府。每有暇即居此亭以徜徉矣。登覽之美、逸興之景、不亦奇乎。一日訪余、求記不止。余所冀在其術業與亭名相稱而固當耳。主人努力哉。主人者誰。板坂氏也。亭在何許哉。駿府也。作亭記者何人哉。羅浮氏也。

亭を環りて三隅皆山なり。南に眺れば、漫漫として洋海の垠り無き有り。東に出るは、小鹿山なり。東南に見るは、八幡山なり。東北に煙斜めに雪飛ぶは、土峰の高秀なり。蒼莽を北に望めば、則ち重山層巒有り。西に河を隔るの數峰有り。近くして清水山の松、

遠くして甲斐白峰の雲。其の勝形、一一に彈し易からず。亭下に地を穿る略約有り。藩垣を修して、衆木を植ふ。四時花葉色を交へて以て人の目を慰す。亭子信に暨なり。恒の術有るか。其の恒を以て之を名るの常有ることを示すとなり。亭を環るの山、常有ること固に久し。其の術の恒、亭の名と庶幾くは相稱はんことをなり。主人吾が幕府に仕ふ。暇有る毎に則ち此の亭に居りて以て徜徉す。登覧の美、逸興の景、亦た奇ならずや。一日余を訪ひ、記を求めて止まず。余翼ふ所は其の術業、亭の名と相稱ふて固に當らんに在るのみ。主人努力せよ。主人は誰ぞ。板坂氏なり。亭は何の許ろに在るや。駿府なり。亭の記を作る者は何人ぞや。羅浮氏なり。

(ア) 簡潔な書出し

まず、書出しに注目したい。欧陽修の「醉翁亭記」は「環滁皆山也」という有名な一文で書き出されたが、それについて『朱子語類』に、「醉翁亭記」の稿を推敲した時、欧陽修は冒頭の繁冗を削って、もともと数十字あった長文をただの五字に絞ったという逸話まで伝えられている¹⁵。羅山にとって、簡潔が故によしとされた「醉翁亭記」の書出しは一つの範例として印象深かったに違いない。「恒亭記」の起筆において、羅山は「環○皆●也」の文型を借りながら、事実即した形で「環亭而三隅皆山也」というふうにし少し表現を入れ換え、「醉翁亭記」の名文句を我が物にした。

ちなみに、『文集』・卷第十六にある「多景楼記」（寛永十六年作）の書き出しはまさに「環楼皆景也」の五字であり¹⁶、「恒亭記」の制作時期とかなりの間隔があるとはいえ、何より重複を嫌う文章の冒頭に「環滁皆山也」の書き方が繰り返し用いられたところに、欧陽修への傾倒¹⁷と文の簡潔さを尊ぶ羅山の気持ちが読み取れる。

もっとも、文は短くさえ書ければよいという単純なものだと羅山は思っていない。大島晃氏は「左伝不及檀弓、恐未足為公論」という発言を俎上に載せ、文章の繁簡に対する羅山の見解について綿密な考証¹⁸をなされた。「左氏繁而詳、檀弓簡而切」というように、同じ事柄についても、繁簡二通りの書き方が可能

であり、うまく料理さえすれば、方法として一方がもう一方を凌駕するようなことは実はないと羅山は考えていた。そのような主張が実行に移された羅山の作例として、例えば、『文集』・卷第十八所収の「忠信胄記」二篇（寛永三年と寛永十七年の作品）と「馬厩額板畫猿記」二篇（ともに寛永十三年作）を挙げることができる。それぞれ執筆した時の事情¹⁹があるにせよ、羅山は明らかに「繁而詳」・「簡而切」といった異なる趣向の対比を鮮明に打ち出すつもりで、意識的に長短両様の文章を仕上げたのである。

ともあれ、文の繁簡という問題に関して言えば、羅山の文章に対する欧陽修の影響はやはり「簡」の方に集中しているように見える。「醉翁亭記」の書出しは、いわば実作の好例として、羅山の創作に啓発を与えたが、一方、やや抽象的なところにおいて、「簡」を説く欧陽修の主張も羅山からの支持を得ている。『文集』・卷第六十六・「隨筆二」に次の一条が見られる。

歐陽永叔曰、簡而有法、惟春秋可當之、通知古今、惟孔孟可當者、此詞寔定論也。六經之中、省文而有法者、莫若春秋。

歐陽永叔曰く、簡にして法有るは、惟だ春秋之に當つ可し、古今に通知するは、惟だ孔孟當る可きは、此の詞寔に定論なり。六經の中、文を省ひて法有る者は、春秋に若くは莫し。

『春秋』を尊崇する欧陽修の考え方に、羅山は賛同の意を表した。その理由として挙げられた「簡而有法」、「省文而有法」という『春秋』の筆法は、「唯以古文為師」の信念を抱いた羅山にとって、まさに理想的な文章の書き方と言える。

（イ）文末の「也」と特殊な文型の反復

「醉翁亭記」の中で、句末に「也」の字が二十一回使われていることも有名であるが、それに関わる羅山の感想は、慶安元年に書かれた彼の隨筆（『文集』・

若し夫れ日出でて林霏開け、雲歸りて巖穴暝く、晦明變化する者は、山間の朝暮なり。

野○芳○發○而○幽○香○、佳○木○秀○而○繁○陰○、風○霜○高○潔○、水○落○而○石○出○者○、山○間○之○四○時○也○。

野芳發いて幽香あり、佳木秀でて繁陰あり、風霜高潔にして、水落ちて石出づる者は、山間の四時なり。

至○於○負○者○歌○于○塗○、行○者○休○于○樹○、前○者○呼○、後○者○應○、僂○僂○提○携○、往○来○而○不○絕○者○、
滁○人○遊○也○。

負へる者は塗に歌ひ、行く者は樹に休み、前なる者は呼び、後なる者は應へ、僂僂提携し、往来して絶えざる者に至つては、滁人の遊べるなり。

のように、実は、孫武の「行軍篇」や東坡の「酒経」と違って、ただ「也」の数が多ということだけではなく、全篇に散在するこの「○者●也」という文句の反復こそ、欧陽修独自の工夫であり、さらに言えば、●の部分（述語）に比べて、○の部分（主語）が長く、そこに様々な事柄を集中させる手法を用いるのが「醉翁亭記」の大きな特色である。

羅山はもちろん、早くからそのような句法に注目し、自らも「也」で結ぶ句の反復という作文の技法を愛用している。枚挙に暇がないが、ここに、文型のみならず、使用された語彙などからも、特に「醉翁亭記」を彷彿させる羅山の文章を挙げる。

玉○殿○之○暎○、高○樓○之○鐘○、是○亭○前○之○朝○暮○也○。

玉殿の暎、高樓の鐘、是れ亭前の朝暮なり。

竹○間○之○黃○鸝○、松○上○之○子○規○、潭○心○之○月○、武○野○之○草○、富○山○之○雪○、是○東○西○南○北○之○
四○時○也○。

竹間の黄鸝、松上の子規、潭心の月、武野の草、富山の雪、是れ東西南北の四時なり。

(『文集』・卷第十六・「儉閒亭記」、正保四年作)

若夫籬外看梅、則隔林彷彿聞菅廟之暗香、況又長松鶻啼、似移若耶之風物、霜後愛楓、則薄晚想像寄雄峯之秋色、加旃脩竹雪飛、如借鍾阜之景氣、此乃鷹峯之四時也。

若し夫れ籬外に梅を看るときは、則ち林を隔て菅廟の暗香を聞くに彷彿たり、況や又た長松鶻啼く、若耶の風物を移すに似たり、霜後に楓を愛すときは、則ち薄晚雄峯の秋色を寄するを想像する、加旃らず脩竹雪飛ぶ、鍾阜の景氣を借るが如し、此れ乃ち鷹峯の四時なり。

林霏朝開、山氣夕佳、花穿午簾、月入紗窓、此乃鷹峯之朝暮晝夜也。

林霏朝に開け、山氣夕佳なり、花午簾を穿ち、月紗窓に入る、此れ乃ち鷹峯の朝暮晝夜なり。

且夫樵蘇唱於路、耕牧遊於埜、行旅憩於坂、鳥集而不驚、獸馴而不畏、在洛外而人不遠、非市中而徑有媒、不江湖而有涓流、此乃鷹峯之境致也。

且つ夫れ樵蘇路に唱へ、耕牧埜に遊び、行旅坂に憩ふ、鳥集めて驚かず、獸馴れて畏れず、洛外に在りて人遠からず、市中に非ずして徑に媒有り、江湖ならずして涓流有り、此れ乃ち鷹峯の境致なり。

(『文集』・卷第十七・「鷹峯記」、寛永七年作)

「林霏朝開」、「樵蘇唱於路」、「行旅憩於坂」など、「醉翁亭記」の面影を偲べる表現が多いことは一目瞭然であるが、語句の類似は別として、「儉閒亭記」と「鷹峯記」の中で特に注目しなければならないのは、「醉翁亭記」に見られる文型の特徴をいわば拡大複写したような羅山の書き方である。朝暮・四時の景物などの形容に用いられた「○是●也」と「○此乃●也」の文型は、それぞれ二回以上繰り返して使われ、二つとも歐陽修の「○者●也」から発展してきたものと看做してよいだろう。「況又」・「加旃」(しかのみならず)などの語を連発し、列挙の技を極めた結果、○の部分が手本以上に膨張してしまい、文の構造

を整えるために、羅山は「是」や「此」のような指示代名詞を新たに挿入したのだろう。

(ウ) 自問自答の手法と主人公の露顕

「恒亭記」の最後は、「主人者誰。板坂氏^㉑也。亭在何許哉。駿府也。作亭記者何人哉。羅浮氏也」という自問自答の形で終わるが、これも「醉翁亭記」の筆法に基づく行文と考えてまず間違いない。設問を用いた欧陽修の原文はすなわち、

作亭者誰。山之僧智僊也。名之者誰。太守自謂也。 (文中)

亭を作れる者は誰ぞ。山の僧智僊なり。之に名づくる者は誰ぞ。太守自ら謂ふなり。

太守謂誰。廬陵歐陽修也。 (文末)

太守とは誰をか謂ふ。廬陵の歐陽修なり。

の二箇所、文中に二問、文末に一問が挿入されている。先述した文型における模倣の仕方と考え合わせると、「恒亭記」の最後に一気に三問を設ける書き方も、手本の特徴を意識的にクローズアップする羅山の慣用手段と理解したい。

さらに、欧陽修は「醉翁亭記」の末尾になってはじめて主人公「太守」の名前を明かしたが、一方、「恒亭記」の場合、恒亭の主人と亭記の作者が明るみに出るのも文末である。一見何の変哲もないところであるが、両者の類似は決して偶然の一致ではなかった。実は、そのような細かい局部にも羅山の考えた「文法」(作文の方法)が秘められている。

『古文真宝後集諺解大成』・「醉翁亭記」の注は、文末の書き方についてかく言う。

羅山曰、柳子厚梓人傳に、前篇梓人とはかり書て、結句にて其姓名楊潜と

云。此篇其文體也。

羅山は、文章の最後になってはじめて主人公の名前が「楊潜」であることを紹介した柳宗元の「梓人伝」を将来し、類例の説明によって「醉翁亭記」の「文体」に解釈を加えた。また、白居易の「琵琶行」を読んで、羅山は次のような感想も残した。

太史公衛青霍去病傳及李広傳唯曰、將軍、驃騎將軍、而至傳末曰、將軍青、驃騎將軍去病。又歐陽永叔醉翁亭記唯曰、太守。至記末曰、廬陵歐陽修。今又琵琶行唯曰、主人、又曰、我、而至行末曰、江州司馬。皆文法也。

（『文集』・卷第五十四・「題琵琶行後」）

太史公の衛青霍去病傳及び李広傳、ただ將軍、驃騎將軍と曰へども、傳の末に至り、將軍青、驃騎將軍去病と曰ふ。また歐陽永叔の醉翁亭記、ただ太守と曰へども、記の末に至り、廬陵歐陽修と曰ふ。今また琵琶行、ただ主人と曰ひ、また我と曰へども、行の末に至り、江州司馬と曰ふ。皆文法なり。

『史記』の「衛將軍驃騎列伝」、「李將軍列伝」、歐陽修の「醉翁亭記」、そして今読んだ「琵琶行」といった名文の書き方には、ある共通点が存在すると羅山は気がついた。つまり、文中においては、登場人物の呼び名にある程度の曖昧さを保つべし。文末になってはじめてその素性を明かすのがよい。それは「皆文法也」、と。

次の表で示されるように、羅山は明らかに先述した「文法」に則って「恒亭記」（慶長十二年作）と「儉閑亭記」（正保四年作）の二篇を書き上げたのである。勿論、文章というのは基本的に変化を重んじるもので、羅山の文はすべてそのような規則を守っているわけではない。実際、「恒亭記」と「儉閑亭記」の制作時期も四十年ほどかけ離れていて、羅山は恐らく文章の構造上の雷同を避けようとする意識を持っていたと思われる。いずれにせよ、豊かな読書の経験

	「恒亭記」(『文集』・卷第十七)	「偷閒亭記」(『文集』・卷第十六)
文中	主人仕吾幕府。 主人努力哉。	主人退公、時時在亭四顧。 主人属二子賦詩。
文末	主人者誰。板坂氏也。	主人和州太守、源姓九世氏、其諱廣之。

から文章の作法を纏め、それを積極的に自分の創作にも取り入れ、しかもかなり細部まで忠実に再現するこの一連のプロセスが目に見える。

五 おわりに

林羅山の詩は、「新しい独自の詩境の開拓創造ではなく、古典をふまえた古人の名詩の模倣が多いこと」²²⁾は、すでに指摘された。本稿における検証の一部も、ある意味で文の角度からそれを再確認したと言ってよい。随筆の中で書かれたように、

杜老曰、讀書破萬卷、下筆如有神。豈詩云乎哉。詩者韻語而文之一體也。古人不分文與詩而爲二也。思之。²³⁾

(『文集』・卷第七十三・「随筆九」)

杜老が曰く、書を読み破る、筆を下せば神有るが如し。豈に詩をしも云へや。詩は韻語にして文の一體なり。古人文と詩と分ちて二つと為さず。之を思へ。

そもそも羅山は、詩と文を分けて考えていなかった。詩文を問わず、羅山の文学における大きな特徴の一つは、まさに典拠主義・教養主義ともいべき古典の継承である。

継承と創造を語る時、より多くの価値を「開拓創造」の方に付与するのは世間の常識である。しかし、継承にも創造にも質の差があり、先行文学からの借用が多くても、羅山の場合は決して浅薄な模倣ではなかったことを、全豹一斑に過ぎないが、本稿の論証によって垣間見ることができる。その意味で、近

世初頭という草創期の時代を生きた羅山の文学には大いに評価できる部分も沢山あると認めなければならない。²⁴

羅山の文章は、規矩に則りながら、風流を解せない腐儒の文字ではない。書卷の気に満ち、知的刺激が溢れている。文章の行間からにじみ出るように現れるのは、文（文学）に対する彼の鑑識眼と、細かい所までなるべく理想の作品（『古文真宝後集』所収の名文を含む文章の手本）に接近しようとする弛まぬ努力の足跡である。杜甫の句の通り、羅山は万卷の書を読破してはじめて、「筆を下せば神有るが如し」の境地に至ったのである。

[注]

- ①本稿における『羅山林先生集』（『羅山林先生文集』と『羅山林先生詩集』）の引用は、すべて京都史蹟会編纂『羅山先生文集』・『羅山先生詩集』（平安考古学会、大正十年）によるが、原文に適宜句読点をつけた。以下『文集』、『詩集』と略称する。
- ②朝鮮通信使榎杖語（『新編覆醬集』・『丈山筆語』）。なお、榎杖は羅山とも筆談したことがある（『文集』・卷六十・「寛永十三年丙子臘月江府與蕃館朝鮮學士榎杖筆語」）。
- ③羅山に与えた朝鮮通信使趙珩の書簡に「愈瑒曰、日域之文章、以羅山爲第一。皆是不爲溢美、不爲虚譽也」との文言があるという（『羅山林先生集』・附録・卷第三・「行状」）。
- ④羅山の文学と読書については、宇野茂彦「林羅山の読書」（『青山語文』、第十四号、一九八四年）と大島晃「林羅山の『文』の意識 其之一——『読書』と『文』」（『漢文學解釋與研究』、第一輯、一九九八年）が詳しい。
- ⑤『文集』・卷第六十六・「隨筆二」の読み下し文の一部を作成するにあたり、浅山佳郎等「羅山隨筆抄訓釈稿（二）」（『漢文學解釋與研究』、第十輯、二〇〇八年）を参照した。
- ⑥引用は『日本隨筆大成』（吉川弘文館、一九七五年、日本隨筆大成刊行会昭和二年刊の復刊）による。
- ⑦はじめ京都東福寺の僧であったが、寛永四年家光の命により還俗。後に家綱の近侍となる。
- ⑧「桂月舟曰、長篇古風、吾邦賦者鮮矣。往往所吟翫、唯七言絶句而已。予謂文亦然也。故詩則以唐三體詩絶句、文則以古文眞寶後集。共爲之楷法。可謂精也。或曰精歟。隘也。非博也。」
- ⑨星川清孝『古文真宝（後集）』（新釈漢文大系・第十六卷、明治書院、一九六三）・解題。なお、本稿における『古文真宝後集』の本文と読み下しの引用も同書による。
- ⑩『文集』・卷第六十六・「隨筆二」（慶長年中作）に「東坡居士文章如太山北斗、学者之所仰也」と記されている。太山は泰山である。また、同じ「隨筆二」には「東坡文其立意精深、如水之波流浪湧、浩瀚汪洋而不可測」や「東坡文如大海」などの文言も見られる。
- ⑪それについての言及が『文集』・卷第六十六・「隨筆二」（慶長年中作）に見える。「首尾之語法、論語多有焉。子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉」（後略）。
- ⑫「年譜」（『羅山林先生集』・附録・卷第一）文禄四年の条に「先生十三歳。（中略）求東坡全集於市乎。自加朱句以終篇」と記されている。
- ⑬羅山の隨筆に『古文真宝後集』に関する議論が多い。例えば、『文集』・卷第七十五・「隨筆十一」（慶

安元年作)の第一～三条は『古文真宝後集』巻首の四篇(『秋風辞』・『漁夫辞』・『婦去来辞』・『弔屈原賦])を対象に、韻脚や語釈についての所見を開陳するものであるが、それらは、皆羅山が『古文真宝後集』を諺解する時に行われた字句の考証から生まれた知見であろうことは想像に難くない。

- ⑭羅山は、慶長年中作の「随筆二」(『文集』・巻第六十六)でも「凡作文則一字之爲主者、往往有焉。韓退之送孟東野序、主鳴字。一篇之中有四十鳴字。陳后山思亭記、主思字。一篇之中有十三思字。歐陽永叔醉翁亭記、也字二十有一。蘇子瞻酒經、亦也字十有六。蓋同法也。共是文詞之冠冕也」と書いている。「文詞之冠冕」として挙げた四篇は、蘇軾の「酒經」を除いて、すべて『古文真宝後集』収録の作品である。
- ⑮原文は「歐公文亦多是修改到妙處。頃有人買得他醉翁亭記藁。初說滁州四面有山、凡數十字。末後改定、只日環滁皆山也五字而已」である。なお、このエピソードはそのまま『古文真宝後集諺解大成』の注釈としても利用されている。「朱子語録曰、六一之文、一唱三嘆。今人是如何作文。有人見歐陽公醉翁亭記、前有數十字、序滁州之山。忽大圈了、一邊注環滁皆山也一句。此發端に、初は字多く有しを、歐陽清書の時に、削て此五字許りを残されしと也」。
- ⑯そのほか、文章ではないが、文山に贈った「四山高雪」詩(『詩集』・巻第十・「寄題石川丈人凹凸壑十二景」)にも「環皆山高深雪」の句がある。
- ⑰随筆における羅山の発言からも歐陽修への傾倒ぶりが窺える。「歐陽永叔修唐書、撰五代史。世以爲司馬遷以來有此編修。其外文章不用奇字、最爲平易。實宋朝一代大家也」(『文集』・巻第七十三・「隨筆九」)とあるように、おおむね史書編修の経歴と平易な文章という二つの理由で、歐陽修に対し親近感を抱いているようだ。
- ⑱大島晃「林羅山の『文』の意識(其之二)文評——『左氏不及檀弓』の論」(『漢文學解釋與研究』、第三輯、二〇〇〇年)。
- ⑲「先是、甲州太守既使余爲之記、以述忠信事。今又應君之求之、再申涉筆」(「忠信胄記」)。「右額板小。故改之、省文如左」(「馬廐額板畫猿記」)。
- ⑳『容齋隨筆』・「統筆」は、慶長九年の既見書目(『羅山林先生集』・附録・巻第一・「年譜」)に見える。なお、洪邁について、羅山は『文集』・巻第六十六・「隨筆二」(慶長年中作)で、「容齋洪邁、南宋孝宗時爲內翰。作夷堅志、著隨筆五集。予嘗觀其議論、賦詩則學白樂天、爲文則習蘇東坡。信南渡已來之名士也」と、仰慕の念を表している。
- ㉑板坂卜齋、号如春、家康・頼宣の侍医。
- ㉒堀勇雄『林羅山』(吉川弘文館、一九六四年)。また、山岸徳平『近世漢文学史』(汲古書院、一九八七年)も「羅山の詩は、大体散文的で詩趣が乏しく、故事なども好んで詠んでいるのは、学者の詩であって詩人の詩とはいえない」と評している。
- ㉓『文集』・巻第七十三・「隨筆九」の最後的一条に記されている。ちなみに、「隨筆九」はもともと四男の読耕齋に与えたものである。
- ㉔羅山の文学を概観し、それを積極的に評価したものとして、松下忠『江戸時代の詩風詩論一明・清の詩論とその撰取』(明治書院、一九八二年)・中編・第一章・第四節「林羅山」、鈴木健一「林羅山の漢詩文一面」(『国文学解釈と鑑賞』、一九九二年三月号)、同「林羅山の文学活動」(『国文学解釈と鑑賞』、二〇〇八年十月号)などがある。

* 討議要旨

楊昆鵬氏は、日本文学において古くから『古文真宝』は参照されてきたが、羅山は主に文章の「構造」に着目したと解釈してよいのか、と確認し、発表者は、そのとおりである、羅山はたとえば歐陽

修「醉翁亭記」の文章構造を細部まで分析し、自著「恒亭記」の文章に活かしている。詩文の手本を広範に求めた羅山であったが、特に『古文真宝後集』を重視したことは間違いない、と補足した。

ロバート・キャンベル氏は、近年では羅山の書いた怪談や和文についての論考、あるいは伝記研究などがなされつつあるが、本発表のように根源的な文体研究はもっとも望まれるものである。今後も掘り下げてほしい、と感想を述べた。